

実施した交流プログラムの概要

資料6-9

【構想の名称】（選定年度24年度・申請区分（Ⅱ））

「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業

【プログラムの目的・養成する人材像】

国内外の日本語学習者・学習ニーズの多様化に対応した教育プログラムを構築し、人物交流・人材循環を起こして多様な日本語学習者に対応できる日本語教育者および実践的日本語運用能力を身に付けて幅広い分野で活躍する人材を養成する。

【構想の概要】

日本語教育学を主専攻・副専攻とする学生に対して海外日本語教育実践の機会＝海外実習を提供するとともに、海外教育機関の日本語学習者に対して実践的日本語教育を提供することを通じて双方向の学生交流を促進する。

○ 本学学生の海外派遣実習

本学にて日本語教育学を主（副）専攻する学生が、各交流相手大学に派遣され、現地の日本語授業にて教壇実習やTA業務を行なった。また書道や茶道など日本文化を紹介する文化交流活動を行なった。短期プログラムでは、春休み、夏休み期間を使って、2～3週間、長期プログラムでは、1セメスターを使って約4ヶ月間、派遣された。



〈 交流相手大学での文化活動紹介 〉

○ 交流相手大学学生の本学での受入実習

日本語を海外で学ぶ学生に、「日本語実践科目」を提供した。交流相手大学の学生は、短期プログラムでは、3週間、6週間の短期日本語集中プログラムへ参加し、長期プログラムでは、正規留学生として、セメスター単位での日本語科目や日本語教育学演習（ゼミ）を履修した。またその他、茶道体験や小旅行等、日本文化の体験や日本人学生との交流活動を行なった。



〈 本格的な茶室での茶道体験 〉

実績

		H24	H25	H26	H27	H28
派遣学生数	3か月未満	19名	41名	59名	49名	58名
	3か月以上	0名	0名	1名	2名	13名
受入学生数	3か月未満	0名	56名	69名	52名	34名
	3か月以上	0名	0名	3名	17名	21名

質の保証を伴った交流枠組み（相互単位認定、共同学位プログラム等）の形成

○ 共同プログラム委員会の設置

早稲田大学と各交流相手大学との間に「共同プログラム委員会」を設置し、カリキュラム、参加学生のケア、事業評価について協議した。

○ 共同評価委員会の設置

早稲田大学と全交流相手大学ならびに外部有識者が一同に会する「共同評価委員会」を設置し、各交流相手大学との取組を共有、評価することによって、プログラム内容や事業の改善を行なった。

○ 厳格な成績管理と単位認定

到達目標、成績評価方法をシラバスを通じて事前に学生に公開するとともに、学生授業評価を取り入れた。また、学生交流を通じて取得する単位の認定に関する摺合せを行なった。



単位認定：

短期派遣学生	「海外実習」（2単位）、「日本語教育実践研究」（3単位）
短期受入学生	「総合日本語（短期）」（2または4単位）
長期派遣学生	「日本語教育実践研究」（3単位）
長期受入学生	「日本語教育学演習」（2単位）、「総合日本語」（3～5単位）等

共同学位プログラムについては、共同プログラム委員会、共同評価委員会を通じて、各交流相手大学と議論したものの、具体的な形成までには至らなかった。

プログラム参加後の学生のフォローアップ・出口対策

○ プログラムコーディネーターによる派遣終了後学生との面談の実施

プログラムコーディネーターが、本プログラムにより派遣された本学学生個々と、派遣プログラム終了直後に、面談を実施した。その際、派遣によって得られた貴重な経験を、今後の人生においてどのように生かしていくか、進路相談も含めたフォローアップが行われた。また本学の学習管理システムを活用し、学生個々の学習ポートフォリオを作成し、プログラム終了後も活用できるようにした。

○ 交流経験学生の活用(重層的・循環的な人材育成)

本プログラムにより派遣された本学学生が、派遣終了後に、派遣の成果報告を行う機会を毎回設定した。また、派遣予定学生が履修する授業内で、過去に派遣された学生や、交流相手大学の学生を招聘し、交流によって、自身がどのように成長できたかを語ってもらった。このことにより、交流経験学生にとっては、交流経験を振り返ることで今後の人生設計を考える契機となり、実質的に進路選択に対するサポートの機会となった。また今後派遣を予定している学生にとっても、先輩方からの話を聞くことにより、年度を超えた学生同士の交流になったほか、自身の成長イメージをあらかじめ描くことができ、予定している実習を有意義に進めることができた。

○ Facebook等を活用した持続・継続的な情報交換

本プログラム単体のFacebookを立ち上げ、本プログラムを通じて各交流相手大学に海外派遣された本学学生や、本学で受け入れた各交流相手大学学生が参加可能なコミュニティを設置した。コミュニティの中には、大学単位で個々に細分化されたコミュニティも立ち上がり、プログラム終了後も、密な交流が行われた。

○ 受入学生、派遣経験学生、派遣予定学生、関係教員による情報交換会の開催

各交流相手大学の学生の受入がピークの時期にあわせて、受入学生、派遣経験学生、派遣予定学生、関係教員が一同に会する機会を設定した。その際、すでに派遣を経験した学生が、これから派遣を予定する学生に対して、現地での交流がより有意義になるような助言を行うなど、情報交換が行なわれた。

情報の発信・成果の普及

○ 総括シンポジウムの開催

本事業の成果報告を兼ねた総括シンポジウムを、最終年度である2016年12月に開催した。その中で、派遣学生が本プログラムを通じていかに成長し、それがどう人生のターニングポイントとなったかを自らの言葉で語る、学生主体のパネルセッションを設けた。当日は企画段階から互いの成長体験について対話を重ねた10名の学生(交流相手大学卒業生2名を含む)が登壇し、各自の成長の軌跡を報告してプログラムの教育効果を示した。そのほかプログラム担当教員、本学関係教員がそれぞれの立場でプログラムの波及効果を指摘し、事業の成果を広く一般社会に発信した。

○ 報告書の作成

年度単位での活動報告書を、主に派遣プログラムに参加した本学学生が中心となって作成した。これらを年度ごとの成果物として、関係各方面に配布した。最終年度では、あらたに最終報告書として、関係教員の執筆による成果報告文書を作成し、独自の冊子として作成するほか、本学が発刊している学術紀要にも特集として掲載し、広く成果を発信する予定である。

○ プログラム専用のWEBサイト・Facebookの活用

本プログラム専用のWEBサイトを設置、プログラムの概要や、各年度の派遣、受入の成果報告会、本事業での学生交流活動等、各種イベントの情報を広く発信した。またFacebookでは参加学生が、実習や交流活動に関する動画や写真をリアルタイムで積極的に発信した。

今後の展開

○ 短期受入プログラムでの交流相手大学学生の継続的な受け入れ

本事業により、本学の短期日本語集中プログラムが、各交流相手大学に広く認知され、その内容と教育効果について高い評価を得た。それにより、これまでのような補助金や奨学金による経済的支援がなくても、本学の短期日本語集中プログラムに参加したいという学生が見込まれている。今後は、各交流相手大学の学生の受け入れにあたって、優先枠を設定したり、プログラム内容の一部をカスタマイズするなど、新たな可能性を探りながら、積極的に受け入れる方策を検討する。

○ 交流相手大学同士の新たなコンソーシアムの形成

本プログラムで培ったノウハウやネットワークを生かし、補助事業終了後も関係が発展するように、新たなコンソーシアムを形成することの合意を得た。具体的な構成や活動の範囲、内容については検討を進めている。